
爪の先まで力を込めて

よぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爪の先まで力を込めて

【Nコード】

N6328B

【作者名】

よぞ

【あらすじ】

東京の大学を卒業して、就職するわけでもなく気ままな一人暮らしを続ける陣内。彼は大晦日に実家に戻っていた。そこでみつけた古いグローブとボール。それは彼の過去の傷跡へと続く物だった。

全身の血が、久しぶりに体中を廻り始めた。

地面にしっかりと足をつけ、左足のつま先から右足のかかとに意識をスライドさせる。

ゆっくりと太ももを上げ、腰から首筋にかけて一本の線を通すように神経を張る。

そして肩。大きくゆっくり振りかぶり、体を前に倒すようにして流れるように腕を振りぬく。

人差し指と中指の爪の先までボールを離さない。体から流れ出るエネルギーを、その最後の一滴までこのボールに込める。

そして放たれたボールは激しいスピードを伴い、およそ18、44メートル先の壁に当たり、低く心地よい音を住宅街の中にある公園に響かせた。

高校を卒業してから4年。

最後に軟球を投げたのはそのずっと前、いつだったか。

大学を卒業したものの就職もせず、気楽な独り暮らしで緩いアルバイト生活をしては、暇つぶしのように漫画を読んだり、ゲームをしたり。

友達は何忙しそうだった。就職したやつ、海外に留学したやつ、道の違う友達と遊んでいるやつ。色々だが、いつの間にか自分の側には誰もいなくなっていた。

大晦日だからという理由で実家に戻り、大掃除の手伝いを命じられた。

大学に通わせてもらいながら就職する気もない俺は、両親になんとなく後ろめたい気持ちがあり、ぶつぶつと文句を言いながらも断れ

なった。

その時に見つけたのが、この埃をかぶったグローブと、中学時代に使っていたボールだった。

掃除が単に嫌になっていたのかもしれないし、燻っている自分が嫌になっていたのかもしれない。

とにかく俺は、気づくとそのグローブとボールを持って、近くの公園で投げ込んでいた。

なまりきっていたと思っていた体は、意外と早い段階で当時の感覚を取り戻していった。

体の中を流れる泥水が少しずつ浄化されていき、若く、温度を保った赤い血が廻りだしていた。

荒くなり始めた息。

そういえば自分はこういう声をしていたんだと、いまさらながらに気付かされる。

「あれ、陣内か？」

振り返ると懐かしい顔がそこに立っていた。

中学、高校と野球部で一緒だった高橋だ。買い物袋を持っているところを見ると、おそらく家の手伝いをやらされている途中なのだろう。

「久しぶりじゃないか。東京に行ってから全然連絡もよこさないし、冷たいよな」

「悪い」

四年ぶりに再会したチームメイトに、後ろめたい感情があった。

もちろんその理由は、俺自身にあることはわかっている。

高橋は本当うれしそうに笑顔を浮かべて近づいてきた。そういえば

昔から、誰にでも懐っこいやつだった。なんだか懐かしい。

「見てたよ。相変わらずいい球投げるな。さすが地区予選二回戦敗退のエース」

「見てたのか」

「随分嬉しそうに投げるやつがいるな、と思つてな。まさか陣内だとは思わなかったよ。フォームを見るまで気付かなかった。お前、変わったな」

「そうかな」

「垢抜けたよ。さすが都会人だ」

へへ、と高橋が笑う。

こつこつ冗談めかした笑顔が高橋の良いところだ。嘘がつけない性格だからこそ、それが表情に表れている。

俺はというと……、確かに変わったかもしれない。

髪は茶髪になっているし、ファッションもここにいたころとは随分違っている。そして何より、本音で話さなくなった。

すっかり癖になったごまかしの笑いを浮かべていると、高橋は足元に転がっているボールを拾って壁に投げた。

関節が柔らかい高橋だからこそその、肘が大分先行する癖のあるフォーム。しかし、鞭のようにしなるその腕から投げ出されるボールは、伸びのある鋭い球だった。

それでも当時に比べるとやはり見劣りがするが、フォームは変わらず滑らかな動きだ。

「まだ野球やってんのか？」

「まさか。お前が東京に行ってから、一度も投げ込んでない。ライバルがいないと張り合いもないしな」

今度は高橋が苦笑いを浮かべた。

「な、陣内。久しぶりに投げ込んでみないか？」

そう言つて高橋はグローブを受け取り、壁の前に座り込んだ。

「久しぶりだ。軽く頼むぜ」

手の中のボールを確認する。

縫い目にしっかりと指を引っ掛けて、セットポジションについた。

高校最後の地区予選。俺と高橋は同じピッチャーというポジションで大会に挑んだ。

運命の二回戦。先発して相手チームを一点に抑えたのは高橋。そして、その後交代して、三点の追加点を許し2 - 4で試合を負け越したのは俺。明らかに俺のせいでチームは負けた。

俺のせいだ。

その一言がどうしても言い出せなかった。

野球はチームプレイでするものだし、勝負は時の運とも言う。でも俺は、それでも俺は……。

「どうした陣内」

「……いや、投げるぞ」

「おうよ」

当時のチームメイトは誰もそのことを口にしなかった。

もともと、甲子園を目指せるような力のあるチームではなかった。

それでも、俺たちは本気で甲子園を目指していた。その為に猛練習もした。それなのに。

余計な考えが頭をよぎり、投球に集中していなかった。

指を離れるタイミングが少し早い。

そう気付いた時にはもう、ボールは的を大きくはずれて高橋の遥か頭上に飛んでいった。

壁に当たり跳ね返り、それを拾う。

「おいおい、どうした。さっきまでいい球投げてたじゃないか」

「すまん」

「もう一球。頼むぜ、あんまり遅くなると母ちゃんに怒られちゃう」

もう一度構えた。

しかし頭の中の考えを振り切ることができない。

あの時の俺をどう思っているんだ？

東京に出て四年、ただ燻っているだけの俺をどう思う？

高橋、どうしてあの日、あの時、俺をぶん殴ってくれなかったんだ。腕を思い切り振り切る。しかし、今度は力みすぎた。ボールを強く握りすぎて、リリースポイントがわずかに遅れる。

低めに放たれたボールは、それでも激しいスピードを伴い、高橋の目の前でショートバウンドして跳ねた。

高橋が慌ててそれを避ける。

「悟！ 大丈夫か!？」

「……つぶねー。平気平気。こんなの部活じゃしょっちゅうだったろ」

「そうか……」

「それにしても……、にしし、悟だつて。やっと昔の通り呼んでくれたな。高橋だなんて、なんかむづかゆくなる呼び方すんなよな、ジン」

懐かしいあだ名だった。ジンと悟。お互いそうやって呼び合っていたことすら忘れかけていた。

東京では、悟のような本当に親しい友達はできなかったから。

「今度は、まっすぐ投げれる気がする」
「そうか。よし、軽くなんてちゃっついこと言うのは止めた。思いっきりこい！」

悟の目が真っ直ぐ俺を捕らえていた。

俺も、目を逸らさず悟を真っ直ぐ見据えた。

左のつま先から右のかかとへ。

腰から首筋へ。

そして肩。あの頃と同じように、牽制なんてダサい。なんて大口叩いていたあの頃のように、大きく振りかぶる。

体を前に押し倒すようにして、その力を右肩へ。そして肘。手首。手のひらを伝って人差し指と中指へ。

爪の先の先までボールを離さない。体中のエネルギーを飛び出すボールへ。

息を止め、何も聞こえなくなり、腕を思いっきり振り切った。

静かな公園に、大きな音が響き渡る。

空気を切り裂く鋭い球が、悟の持つミットへ吸い込まれていた。球を投げることにだけに集中しすぎて、俺は公園の地面に転がりこんでいた。

土ぼこりの中、まったく動かない悟の姿が見えた。

「　　ってえ！！　ばかやろお！　いてえじゃねえか！！」

悟はグローブを投げ捨て、赤くはれ上がった右の手の平を激しく振り払っている。

なんだか、腹の底からおかしくなった。何がおかしいのか自分でもわからなかったが、自然と笑い声が飛び出していた。

「こら！ 何がおかしい！ ピッチャーグローブなのに本気で投げやがって。いや、本気で投げるとは言ったけど！」
「悪い！」

地面を転がりまわって、腹を押さえて笑った。

途中、二万もしたジャケットが汚れる。とか、ビンテージのジーパンなのに、とか頭をよぎったが、そんなものはどうでもよく思えた。ただ、とてもおかしかったのだ。

悟は本気で痛かったらしく、転がりまわる俺にグローブを投げつけてきた。

それを拾い、また投げ返す。それをまた投げ返す。しばらく、そんな子供みたいなやり取りを続けた。

「ったく、やっぱお前変わってないぜ」

「おう。そうみたいだな」

「……んじゃ、俺行くわ。母ちゃん怖いしな」

「おう」

悟はそう言って公園の出口に歩いていった。

俺は、悟に言わなくちゃいけない言葉がある。
今なら、きつと言える。

「なあ悟」

「ん？」

「……俺のせいで、負けちまったな」

悟の目が丸くなった。

驚いているのだ。本当に、顔に出るやつだ。
それから、何も言わず公園から出て行った。

それもまた、悟の答えなら、俺が受け止めなくちゃいけないことだと思う。

しばらくその場に立ち尽くして色々なことを考えたが、いつまでもこうしちゃられない。

グローブとボールを拾い、公園の出口へと歩き出した。その時だった。

帰ったはずの悟が、今度はグローブとボールを持ってそこに立っていた。

「悟……」

悟は何も言わず、手に持っていたボールを投げてよこした。軟球とは違う重みが手にずしりと伝わった。

「これ……」

「忘れ物だよ。お前、卒業式の後すぐに帰っちまったからな」

それは、チームメイトの寄せ書きが書かれた硬球のボールだった。三年間の思い出や、一緒にできて楽しかったなどの書き込みの真ん中に、ボールの4分の1を占める大きな太い字でドンマイと書かれていた。その下に、小さく悟の名前がある。

「誰も気にしちゃいねーよ。チームプレイだからな、野球は。ワンフォアワンってやつだ」

「……バカめ。それじゃワンマンチームだ」

「あれ、そうか？」

今日は色々なことがある一日だった。

昔のグローブが出てきたり、久しぶりに熱くなったり、笑ったり、泣いたり。

誰も自分を恨んでなんていないって、心のどこかではちゃんとわかってはいたけども、悟がそのことを口にした瞬間、俺は色々なものから解き放たれた気がして、ついつい涙が流れてしまった。
あいつはいいやつだから、それを見なかったことにしてくれただけ、その後のキャッチボールであいつの気持ちはわかった。本当に顔に出るやつだ。

正月が終わったら東京に戻ろうと思う。

そこで、俺にできることを探そうと思う。

爪の先まで力を込めた球を、もう一度投げるために。

(後書き)

久しぶりの短編です。

一言でもいいので、感想をいただけると幸いです。
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328b/>

爪の先まで力を込めて

2010年12月19日00時36分発行